



『おいしい給食 卒業』2022年：
虚構が描く学校外での生徒と教師の政治的実践

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-04-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 稲井, 智義 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/0002000205

『おいしい給食 卒業』2022年 ——虚構が描く学校外での生徒と教師の政治的实践——

稲井 智義^{*1}

本稿は、2022年5月公開の『劇場版 おいしい給食 卒業』をほぼ同じセリフで小説にした紙吹みつ葉『おいしい給食 卒業』（中公文庫、2022年10月25日、括弧内に著者と刊行年、頁数を記す）を検討する。制作背景として綾部真弥監督と永森裕二企画・脚本による「特別対談」を参照する（2023年10月14日最終閲覧、<https://oishi-kyushoku-2-movie.com/special.html>、本文に発話者を示す）。

学校給食を主題にした『おいしい給食』は最初、2019年10月から12月までテレビドラマとして放送された。2020年3月6日に『劇場版 おいしい給食 Final Battle』（劇場版1）が公開された。そして『おいしい給食 Season2』が2021年10月から12月まで放送され、2022年5月13日に劇場版2が公開された。本作品のモチーフは、給食好きの30代男性教師甘利田幸男と、給食をアレンジして食べる男子生徒神野ゴウとの「本気の給食バトル」（綾部）である。甘利田は毎回、神野に圧倒される。第1シーズンの時代設定は1984年度で、神野は中学1年生であった。劇場版1終盤で甘利田は別の学校に異動した。1986年度の第2シーズンで甘利田は転校してきた3年生の神野と再会した。

第2シーズンは、永森がコロナ禍前に構想していた2年生編ではなく3年生編となった。私が劇場版2を観賞したとき、——翌9月に閉鎖される施設にある映画館に他には母娘（小学校高学年）しかいなかったが——まさにコロナ禍であると感じた。なぜなら、劇場版1で教師たちの飲み会のシーンがあった一方で、劇場版2では「酒席には、良い思い出がありませんので」（紙吹、2022年、21頁）という甘利田のセリフだけがあったからである。私はこの瞬間、この映画が2020年代の現実と1980年代の虚構が出会った作品であると再確認した。虚構と現実の関係については、第1シーズンでは常節中学校の目標に「食育健康」とあり、フィクションの要素が強かった。国会図書館で食育を検索しても1980年代では10件程度しかない。しかし第2シーズンでは黍名子中学校の「モットーは質実剛健」（同書、19頁）とあり、本作品が日本の現実に即したフィクションになったと考えられる。

東京都足立区立中学校を舞台にした『3年B組金八先生』（1979-2011）を意識した部分もある。劇場版1で甘利田を異動に追い込む教育委員会教師鎬木優を演じたのは、『金八先生』第二シリーズ（1980）で「俺はみかんじゃねえ。人間なんだ。」と叫んだ生徒加藤優を演じた直江喜一である。坂本金八の同僚を演じた森田順平も第2シーズン最終回で鎬木の上司を演じる。金八は1980年代前後のドラマで描かれた「熱血教師」の典型である（山田浩之『マンガが語る教師像』昭和堂、2004年、26頁）。甘利田は「熱血教師」ではなく、一見厳格を装い給食好きを悟られないようにするが、多くの生徒と教師が気づく。他方で近年、似た学級名を持つ『3年A組』（2019）や、同じ製作者で作られ「はきだめクラス」と呼ばれる「3年D組」の『最高の教師』（2023）が、SNSや高校生のスクールカーストの問題を描いた。さらに『金八先生』全シリーズが同年春から秋まで無料配信された。

こうした虚構が描く学校像をめぐる拮抗をふまえて、『おいしい給食 卒業』の後半に注目する。

^{*1}北海道教育大学旭川校 教育発達専攻幼児教育分野

神野ゴウ「[この一週間の]うちの中学の[給食]残食率のグラフです。明らかに増えています」、
「配膳室の人に手伝ってもらって調べました」、「——元のおいしい給食を、取り戻すために」（紙吹、2022年、149頁、角括弧内のセリフは2022年10月5日発売の映画映像に基づく）

鍋木優「参考までに、この子の意見をセンター長会議で聞いてみようじゃありませんか」、「貴重な子供の、生の意見だ」（同書、151-152頁、小説では「生の声」）

鍋木は「大人が君たちの未来を真剣に考えて健康食に切り替えているんだ。」と会議で言う（同書、158頁）。この「生政治——即物的なコントロールの強まり」（千葉雅也『現代思想入門』講談社現代新書、2022年、98頁）によっておいしくなくなった給食をめぐる、神野は校門からタクシーに乗って役所に来た。「大型の調理場が複数の学校に給食を提供」（藤原辰史『給食の歴史』岩波新書、2018年、7頁）する給食センターの管理栄養士四方田岳たちに、神野は役所に乗り込んだ理由を上記のように述べた。そこに現われた鍋木は甘利田が担任する神野を会議に招き入れた。鍋木が神野の意見を真剣に聞く気はないにしても、ゴウは会議で「生の意見／声」を発した。走ってきて遅れて到着した甘利田は「あえて言おう。給食は、デタラメであるべきだ」、「だが——それがいいんだ。子供たちは与えられた献立を、自分たちで工夫して食べている」、「子供に必要なのは、好奇心と創意工夫。」（紙吹、2022年、164-165頁）と反論する。四方田は会議室の外で神野と甘利田に、会議の方針に従いながらも「私は——おいしい給食が、作りたいです」と宣言する（同書、171頁）。

文部科学省主権者教育推進会議委員の小玉重夫は「正解主義の圧から解放され、答えのない問いと向き合う探究的主体性を備えた市民の育成」を課題とし（2020年12月7日第15回会議報告資料『大学段階における主権者教育と教員養成の在り方』23頁）、「学校外での政治的実践」の意義を述べる。

「そのような政治的主体を育成するためには、学校で具体的政治的事象を扱った政治教育をすることと合わせて、学校外での政治的実践への生徒の参加が求められるだろう。それによって、学校や教師の権威に単に服従するのではない、生徒の政治的主体化が展望されるからである。」（小玉重夫「政治教育とシティズンシップ」『女性展望』718号、2022年、23頁）

「配膳室の人」女性二人に手伝ってもらい自分の中学の残食率を調べて役所に乗り込んだ神野ゴウの姿に、教室・学校外での「探究的主体性」と「政治的主体化」が読み取れる。神野のあり方や甘利田の言葉は、1964年3月と1989年3月の幼稚園教育要領に「好奇心」の語がないように、1980年代の教育史と比べても特異である。神野を追いかけた甘利田のあり方は、生徒の「探究的主体性」に応答する教師の非主体性を示している。同様に『最高の教師』最終回で「生徒に託された」という副題が明らかにされたように、教室を変えようとする生徒の主体性に応じる教師が注目されている。

2023年10月放送開始の『おいしい給食 Season3』の舞台は、「その後の教育改革の基本的路線を準備する」1984年から1987年までの臨時教育審議会（小国喜弘『戦後教育史』中公新書、2023年、172頁）を経た1988年度の函館である。「私たちは、虚構だからこそ描き出せるものに触れることで、はじめて現実に対して適切に対抗（対応）し得る」という宇野常寛（『2020年代の想像力』ハヤカワ新書、2023年、23頁）に賛同し、今後も本作品を注視したい。本書評が苦手な人にも、30歳前後の3年学年主任宗方早苗が語る言葉、「私は……最初甘利田先生が、正直苦手でした。思ったことをなんでも言ってどんどんルールを変えて、でも自分の意見は[絶対]変えなくて。」（紙吹みつ葉『おいしい給食』中公文庫、2021年、331頁、角括弧内は映像）を添えて、「答えのない問いと向き合う」教師のあり方を模索する原動力になる本作品を薦めたい。神野は給食を守るために「先生になって、その後、教育委員会の職員を目指します」と甘利田に宣言し、卒業する（紙吹、2022年、213頁）。

付記：本稿の一部は2022年度教職論、2023年度保育内容指導法（環境）などで扱った。「おいしい給食当番」として劇場版2を支援したため、エンドロールに私の氏名が記載された。